

◆【海員随想】 同級生③ 及川帆彦

**船員になりたいという考えを、兄は賛成して「1年ぐらいなら、学費は俺が出してやってもいい」と言ってくれた**

高橋に経緯を話すと「それはよかったじゃないか。近いうちに、海員養成所の秋の生徒募集があるはずだ。ぜひ受験してみるんだね」と言った。

9月の初めに、宮古海員養成所の入所試験を受けた。試験場は塩釜の小学校であった。中学を中退して以来、勉強というものを全くしていなかったので、自信はなかったが、幸い合格の通知が来た。

10月の初めに、宮古海員養成所の航海科に入所した。そして1年後に卒業して、それから間もなく内地航路の貨物船に、甲板員として乗船し、船員生活をスタートさせた。

昭和26年の夏、大阪に入港していた私の船に、高橋が訪ねてきた。彼の船もたまたま大阪に入港していたのであった。彼には時々手紙を出していたので、私が乗っている船を知っていたのである。

「船乗りはどうだね？」4年ぶりに会った高橋は私にそう尋ねた。

「おかげで、俺の性には合っているようだよ。ずっと続けていきたいと思っている」

「そうか。それはよかった。ところが俺の方は船乗りを辞めなければならなくなった」

「辞める？」

「うん」

高橋の父親は左官であった。戦後すでに6年が経ち、仙台の焼け跡にも郊外にも家がどんどん建ちだして、建築ブームになっていた。それで父親は長男の彼に「船乗りを辞めて、左官になって、一緒に仕事をしてくれ」と頼むのだという。次男の弟はすでに父親の弟子になって、一緒に働いているらしい。

「親父は俺が船乗りになることには反対だったから。長男の俺に仕事を継がせたいと思っていたのだが、戦争中であつたし、男はどうせ兵隊に取られるのだからということで、しぶしぶ承知してくれたのだ。だから俺は、親父には借りがあるわけよ。それでその借りを返そうかと考えているんだ」

「そうか」

「外国航路も盛んになってきたし、今辞めるのは残念なのだが、仕方がない」

それから2カ月ほどして、高橋からはがきが来た。

「船乗りを辞めて、親父と一緒に働くことにした」という内容であった。

彼のおかげで船員になった私は、定年まで続けることになった。

ふと思うことがある。戦後2年目の夏、あのとき、仙台の街で高橋と再会していなければ、自分は船員になっていただろうか、と。

